
東方吸血鬼

ふれいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方吸血鬼

【Nコード】

N5449Z

【作者名】

ふれいむ

【あらすじ】

彼は世界で最後の吸血鬼だった。彼の力は皆から恐れられ、すべての人間から追われた。彼は世界から捨てられて、彼も世界を捨てた。彼は自ら幻想の存在となった。

ついた先は遙か昔、彼は第二の人生をどう生きる？

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる

俺には力があつた、人を超えた力があつた。圧倒的な強さ、子供が持つには大きすぎる、絶対という言葉で形容されてもおかしくはない力を持っていた。正確には、もとから持っていた力と、与えられた力。

けれどもそれで手にするものは？ 何もなかった。あつたのは俺を異端扱いする眼だけ。

ただ忌み嫌われて、追われて、居場所がなくなつて。どうしようもなくなつて逃げた。

それを、みんなは煙たがるように自分たちから遠ざけた、俺は一人だった。

この原因はなぜか？ 俺が吸血鬼だからだ。既におとぎ話となつている存在。俺はそんな存在であつた。

俺は十四歳の冬の日、この世の最後の吸血鬼になった。

西暦4039年、今年で俺は2050歳。既に成長は中学生のうち止まり、老化も止まる。

翼が生えてきたのはいつだったか、俺の今までの人生を血で塗るかのような深紅の翼。爪も牙も鋭くなり。日光、流水、純銀、同時に弱点も生まれた。

黒く、地面につくほどの長いコート。顔を隠すフード。ただし、翼を通す穴だけは開いていた。

それは、俺が夜に紛れる為の。黒に染まるためのものだった。

左頬の金色の痣、三つ巴を描くそれは吸血鬼の証。レミリアにはこんなものないが……理由はわからない。

世界が俺を捨てたように、俺も世界を捨てた。

俺は遥か昔、とある存在と出会った。

東方projectというゲームの世界、きっかけはとうに忘れてしまったが。

「幻想郷はすべてを受け入れる」、その言葉は彼にとって何とも言えない響きを持っていた。

もし、これが本当にあるものだったなら……俺だって受け入れてもらえる、異端として追いついてるのではなく、一つの存在として受け入れてもらえる。それを夢見てた。

吸血鬼が実際に受け入れられている世界、俺は望んでいた。

そう、こうして2000年間の間。俺はすべてに忘れ去られるように、日の当たらないところで死に近い生活をしていた。

もし、それが本当に存在するものだとわかった時は、どれだけ感激に浸ったことか。

俺は、その理想郷を目指すようになった、誰でもない、自分の居場所を求めて……

そしてある日、俺はたどり着いた。全てを受け入れる理想郷への扉を見つけた。

そして、今夜が決行の日。

俺は自ら幻想への扉を開く、不可視にて、その存在が絶対な。それを

その日、世界から一人の青年が、幻想の存在となった。

気がつけば俺は見知らぬ場所にいた。今は夜か、星空がきれいだ、俺はこのままこの輝きを見ないで、束縛された永遠をただ生きるだけの存在として生きるはずだった。その輪廻から俺は抜け出した。俺はたどり着いたんだ。

ここは神社の境内か。目の前に建物があるのに歩き出せない。けれどもここは幻想郷のどこだろう？ どこかで見たことがあるような気がする。しかし考える暇を時は与えてくれなかった。

疲れという抵抗不可のものが、俺に襲いかかる。おれはその場に崩れ落ち、眠りに落ちた……………

傍に、憧れの存在を目指した。黒い日傘が音を立てて落ちた。装飾も何もないシンプルなそれは、彼の性格を物語っていた。

そして、入れ違いになるように神社の障子が開かれ、彼を見つけ出し、中へと運び込んだ。

彼の日傘を見て、不思議には思ったけれども考えないことにした。ただ、彼を保護したのであった。

温かい、ぬくもりを感じる、これが遥か昔に俺に向けられなくなった感情なのか？

今ではそれさえもわからない。ここはどこなんだ？

冷静になって今の状況を見ってみる、ここは……おそろくさっきの神社の中であろう、どことなくそれらしい雰囲気漂っている……足音が聞こえるな、俺を助けてくれた人であろうか？ だとしたら助かった。

あの日差しの中に取り残されていたら俺は今頃灰になっていただろう。これは、俺が受け入れられたということか。なんだか嬉しいな、涙が出そうだ。こういう風に泣きそうになったのは何年振りだろう？

俺は、これを求めていたのか。しかし、みつともない姿を見せるのは少し嫌な感じがするな、堂々としておこうか。

そうして部屋に入ってきたのは、俺の予想もしない人物だったけど。そう……

「（諏訪子様……だと……）」

そう、どこからどう見てもあの東方の洩矢諏訪子だったのだから。驚きを通り越す。

「目が覚めたみたいだね、元気かい？」

「ああ、助けてくれて感謝する」

ああ、さすがにいきなり名前で呼ぶわけにはいかないからってなんて言おうか考えてたら……てんぱって無愛想になってしまった。

「私は洩矢諏訪子、あんたはなんていうの？」

「俺か？ 人間だったところの名前は千年以上も前に捨てた。それ以来名前なんか使う機会なかったし、そんなものはない」

諏訪子は驚き、特に千年のところで大きく驚いた。確かに俺はかなり年上なんだろうけどさ。未来人だけど。そしておそらく興味本位で聞いてきたのだらう。どうしてそんなことになったのかな。

「ねえ、よかつたらあなたについて詳しく教えてくれない？ お近づきのしるしに」

「別にかまわないけど、あまり気分がいい話とはお世辞にも言えない。それでもいいのか？」

それに本当のことをすべて話すのはできない、ここが東方という世界だということに関しては本人たちが知ってはいけないことだろう。なぜだかそれだけはわかる。

「別にいいよ、話してもらえるだけでありがたいんだから」

俺は少し間をおいて、ゆっくりと全てのことを話した。

多少変えてはいるが、東方の存在を知らず、気が付いたらここにいたということにしておけばいいだろう。それでも十分筋は通った話にはなる。さあ、これが俺の腐りきった人生さ。

長い間話した、醜いことをすべて吐き散らした、残ったのは空っぽの器だけだった。

そして、諏訪子がゆっくりと口を開いた。

「じゃあさ、よくわからないけど、こっちでみんなに受け入れてもらえばいいんじゃない？ 最低でも私はあなたの味方でいてあげるからさ」

「そうか、ありがとう」

満足した様子で、彼は笑みを浮かべた。それは、彼の人生の中で、

一番綺麗なものだっただ。

「じゃあ教えてくれないか？ 今度は君の事を」

彼の大きな疑問、それは、ここが守矢神社なら本来いるべきあとの二人がいないこと。彼はそれを自然に聞き出そうとした。そして得た答えはともではないが考えられないものだった。

ここは、幻想郷ができた時代よりはるか昔、諏訪大戦よりも少し昔であったのだから。

彼は驚きはしたが、悲しみはしなかった。だって彼が得られる結果はどちらでも変わりはないのだから。

「とりあえず、うちで暮らしていかないかい。あんたがいると退屈しなさそうだし」

言葉の奥には、同情とはまた違う意味が込められていた。神と人間との差を理解している彼女だからわかる、種族の違いという壁の辛さ。それを彼に感じたからだっただ。

「そうか、だったら好意に甘えろとしよう。これからよろしく頼む。わかっているとは思うが、精神が死に切った世捨て吸血鬼だが、それなりに役には立つだろう」

自分で自傷していても、何も感じない。それは成長なのか退化なのか？

「じゃあさ、名前を決めようよ。ここで暮すんだからあんたじゃ不便だしさ。どうだい、自分でかつこいい名前でもつけてみたらどうだい？」

「名前か、考えたことはあまりなかったな……いつそのことこの吸血鬼としての力からとってしまおうか。そうだな、あかはね紅羽きり霧、こう名乗らせてもらうか。自分という吸血鬼はここにいるという意味としておこう。この名前が俺の存在の証明となるように」

「いい名前じゃないか、じゃあ早速信頼の意味でご飯にしよう。何か食べたいものはあるかい？」

……正直に言ったらまずいよなあ、人間の血液、できれば若い人の希望なんて。

ここは適当な動物で我慢するしかないのか。さすがに自分の領土の人間が被害にあっている顔はしないだろう。

けどなあ、俺千年単位で血を摂取してないわけで、できれば人のやつがいいんだけどなあ。まあ贅沢は言ってられないか。

「……食べ物ならなんでもいいけど、できれば動物の血でもあるとうれしい」

「ああなるほど、仮にも吸血鬼ってことなら……今から適当に猪でも捕まえてくるから待ってて」

……以外に野生児な神様だったんだな、諏訪子って。まあ以外というわけでもないけど、むしろ妖精とかと一緒に遊んでそんな雰囲気あるし。

まあ昼間は迷惑かけちゃうかもしれないけど、基本夜型だし、大丈夫だろう。

さて、ここは信頼の証が来るのを待たせてもらいますか。

世界を捨てた彼は自ら幻想の存在となる（後書き）

はじめましての方ははじめまして、他の小説を読んでくださってる方はご無沙汰してます、ふれいむです。

今回は過去転生最強ものに手を出してみました。どうかこれからもよろしく願います。

感想指摘評価、なんでも待ってます！

男は自らの忌み嫌われた力を見る

食事の時間が終わった。

言った通り本当に猪を捕まえてきた諏訪子、ちなみに久しぶりに飲んだ血でテンションが上がって、一敵残らず飲み干してしまった。

とりあえず今は、案内された日光を完全にシャットアウトできるといふ部屋にいる。

そこで諏訪子とこれからのことを話し合うつもりだ。

しかしこの時代でもう日光を完全に遮ることができるなんて、案外建築技術は昔っからの受け売りなのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、諏訪子が口を開いた。

「じゃあさ、とりあえず霧は夜型なわけだ、じゃあ私が寝てる間に霧が活動をして、昼間はその逆になるってことだね」

「ああ、日が沈んでいる間は俺も自由に行動できるから、今日みたいなことはしなくても大丈夫だ、適当な動物でも襲って食べてるさ」

諏訪子は一瞬迷った顔をしてから答えた。

「人間じゃないんだね」

「さすがに諏訪子の領土で他の吸血鬼を作るつもりはないさ、いや、永遠に作るつもりはない。人間の血が足りなくて、禁断症状らしきものが出たなら、適当にこっそり抜き取るさ。牙を使わずにな。まあそんなことはめったにないが」

だけど、千年以上まったく活動しないことによって今まで耐えてきたのだ、どうなるかはわからないが……

諏訪子は俺の事情を知っているだけあつてすぐに納得してくれた、俺が自分と同じような境遇の人間を作りたくないということを悟ってくれたのだろう。

「とりあえず、夜と昼の境目の短い時間しか話ができない。けれどもどちらも一日寝ないくらいどうってことないからな。そこは問題がないだろう」

神も吸血鬼も一日二日の徹夜でへばったりはしない。

その気になれば、諏訪子はずっと寝なくても大丈夫だろう。俺はやばくなるけれども。

とにかく、夜型と昼型の同居でも、まったく問題がないわけだ。

「じゃあさ、もしいいんなら霧の力を見せてよ。人間から追われるほどの力を見てみたいしさ」

……なるほど、確かに気になるな、という方が無理かもしれないなけれども……いや、ここはすべてを受け入れるのだから、俺の力はむしろ知ってもらった方がいいだろう。その方がいざという時に役に立つかもしれない。

そのとき諏訪子は、考え事をしているときに霧の翼がびくびく動くというかわいらしい癖を見つけた。もちろん内緒にするが。いざという時にばらすつもりであろう。

「わかった、じゃあ今夜、日が落ちたら見せてやる」

「じゃあ今はとりあえずここにいな、何かあったら呼んでちょうだい」

諏訪子は部屋から出て行った。

残されたのは静寂だった、しかし、ここは俺の隠れ住んでいた場所の静寂とは違う。あくまで静まり返る中にも、目に見えない光があった。

本当に、諏訪子の優しさに感謝する。もし境内で灰となつて一生を終えていたら、自分は浮かばれなかったであろうから。

「さて、夜まで眠っておこうか、久しぶりの夜を満喫するためにも」

俺は早速、丁寧にひかれていた布団に入って眠りについた、まだ疲れが残っていたのだろうか、あっさり眠れてしまった。

「もう日が暮れたよ、そろそろ起きたらどうだい？」

この声は……諏訪子か、もう夜だというのか。

目を開けて周りを見渡すと、窓があいているのにも関わらず、入ってくるのは太陽の光ではなく、優しい月の光であった。

「目が覚めた？ 約束の夜だよ」

ああ、そういえば俺の力を見せるという約束だったな、すっかり忘れていた。

「じゃあここから離れよう、一応直ぐに衰弱して死ぬ程度まで力を出せば、地形を変える程度の力はあるものでな。どこか広い所がいい」

「広いところねえ……まあついてきて」

いま俺が言ったことは本当だ、ただ俺には二つの力があり、片方は人間だったころから持っていた。万能で代償がない。これは能力ではなく俺の特殊性だ。魔法でもなく、純粋な俺の力だ。

もう一つは吸血鬼になってから手に入れた力、いわゆる「程度の能力」だ。

代償がある代わりに超強力で山を分断する。しかし後先を考えず、全力で撃てば俺はすぐになんとかしないと死んでしまう程度に衰弱する。（吸血鬼の生命力でだ、普通の人間なら速攻死に至る）

まあ、今日はどちらも見せてやろうじゃないか。

諏訪子について行くように翼を羽ばたかせた。遅れないように飛んでいく。

久しぶりの感覚だが、体は鈍っていないようだ。これなら能力の方も大丈夫だろう。

この世界では、隠す必要もないんだ。存分に恩恵に授かるうじゃないか！

「ついたよ、これだけ広さがあれば足りるかい？」

「ああ、十分だ。じゃあ早速見せてやろうじゃないか」

俺と諏訪子は広場の真ん中にいる。この広場、天然のものらしく人の手が入っていないらしい。広さも大体20×20mくらい、十分だ。これだけあればある程度はできる。あくまである程度だが。

「じゃあまずは俺の力から見せよう。これが俺の紫黒^{しぐろ}だ」

手で空を切ると、その手に現れたのは剣、紫とも黒とも言えない色をしており、生きているかのような生々しさと光沢を感じるものだ、一応金属ではあるが、感じられる異常性という面ではどんなものでも霞んで見える。

「なんだいこれ？ 見たところ無機物みたいだけど……」

「紫黒、無限に体積を変え、自在に形を変え、適応して質量を変える。これは俺の体の一部、左手の甲から出てきているのはわかるが、詳しいことはわからない」

厨二全開だが本当にそうなんだ。紫黒は俺の自在に動く、いわば半身と言ってもいい。

この力のせいで、俺の人生は狂ったが、今こうしていられるのなら安い対価なのかもしれない。

「それじゃあもう一つは危ないから、ちょっと離れて」

諏訪子は言われたとおりに少し後ずさる、まあ俺だってそっちの方には被害が行かないようにするけどさ。

「これが俺の能力、血を力に変える程度の能力」。自らの力の根源は、自らの血液という神秘性にある。吸血鬼にぴったりの能力だ」

自分の血液の一部を消費、自らを取り囲む霧へと姿を変える。色は俺の紫黒と同じ色だ。

これも俺の左手の甲から発せられているためであろうが……詳しい理由はわからない。

そんなことを考えているうちに、俺の体の半分が霧に包まれた。

「それが霧の地形を変える力かい？」

「ああ、これをこすりすれば地面を掘れるぞ」

左手を前につきだすと、霧がかなりの速度で地面をこすりながら前へと進んでいく、不思議と音は聞こえない。

全てが通り過ぎると、ただ3m近く掘られた溝が、端が見えないほどにどこまでも続いていた。

「できる限り抑えてこんな感じだな」

「言葉が出ないよ、それでできる限り抑えただって？ 私もそこまでやるのに結構苦勞するのに……」

しかし、俺だって左手の甲から血が出てきている、もうこの部分だけ痛みになれてしまったくらいだ。

「とまあ、とにかくこれで一部だとわかってくれればいい。それに俺にはまだもう一つあるしな」

コートの中から取り出されたのは魔剣ダインスレイヴ、一度鞘から抜けば一度生血を吸い、誰かを死に追いやるまで鞘には戻らない、その一閃は的をやたまず、決して癒えない傷を残す。血を求める魔剣。

「これが俺が吸血鬼になったとき、最後の吸血鬼に選別をくれてやると言ってもらったものだ、一度抜けば、生血を浴びるまで決して鞘には戻らない」

「よくわからないけど、とりあえず勝手に抜いちゃあいけないのはわかったよ、けどまあそこまで力があつたなんてねえ、もう私には理解しきれないよ」

そこまでなるのか、まあそれでいいのかもしれないが。強すぎる力は持ち主を滅ぼす。

そんなものは知識としても持っていない方がいい、そうだろう。とりあえず簡単にだが、俺の力を見せた。これで納得してもらえるのだからこれでいいだろう。

「さて、これだけ見れば十分なんだろう？ 戻ろっじゃないか」

「そっだね、まあ飛びながらも話は出来る」

俺たちは同時に飛び立ち、平行になるように速度を保った。

「ねえ、どうしてそんな力があるんだい？」

「俺にわかったら苦労はしない、だったらとうに解決しているさ、俺が人間を追われることなどなかったよ」

「そう、何か悪いこと聞いちゃったね」

素直に謝る諏訪子、俺だってあまり触れられたくはないが、こつちではもう違うんだ。

確かに人間たち眼には異形に映って、忌み嫌われるかもしれない。けれども、諏訪子たちみたいな存在にとっては何ともないんだ、幻想郷が出来てからは、本当に人間たちからも受け入れてもらえるんだから、それまでの辛抱だ、なにも何千年か立てば時は来るんだ、それまで我慢すればいいだけの話、それに神や、妖怪たちは俺のことを認めてくれる、それで十分なのさ。

「なあ、神様やっててさ、人間の中に混じっているいろいろできたらな、とか思っただことない？」

「そりゃあるさ、私だってずっと一人なのは嫌だよ。けどまあ今まで何ともなかったんだけどね、まあ正直に言っちゃえば一緒になっ

て騒ぎたいよ。けどさ、それが出来ないから信仰と恩恵という形になったんだ。私はこの理を覆してまで、壊してまでとは思わない。だってそれが皆の幸せにつながってるんだから」

……そうか、言われてみればそんな気がしなくもないな、俺は何か勘違いをしていた……というわけでもないな、だって俺のしてきたことは無駄ではなかったんだから、人間に近づこうとして、それでも人間というコミュニティから追い出されて、それでもここに来られたんだから。たどり着いたんだから。それでいいじゃないか。

俺は世界の理を変えるつもりはない、ただちょっとだけ自分が幸せになりたいだけなんだ。

「なんとなく、わかった気がするよ。ありがとう」

「お礼を言われることを何かしたっけ？ まあ素直に受け取ってえおくよ」

「そうしてくれ」

俺は今日、一つの結末と答えを得た、けれどもそれが本当に正しいのかは誰にもわからない。

けどさ、ただ一つわかるのは俺のこれからの一生は、とんでもなく面白そうだってことだ。

なんでかって？ こんなに素敵な仲間がいるんだぜ、それにさ」

「なんだから。」

「ねえ、帰ったら一杯やらないかい？」

「酒は久しぶりだな、よし乗った、俺も賛成だ」

「じゃあ少し急ごうか」

夜空に二つの影が一閃した。

縁側から、月を眺めて二人で飲む酒、少し前までは考えられなかった体験だ。

「ねえ、霧は神についてどう思う？」

「神か？ 諏訪子みたいなのが最初の知り合いだと分かんないかな」

「なかなか言うねえ」

こんな風に俺は、なんだかんだいって俺は、人間が大好きなんだ。神様だって吸血鬼だって大好きなんだ。

けど、ちょっとだけ歯車が噛み合わなかっただけ。けど、俺がそれに気が付くまでに、あとどのくらいかかるのかな？

「とりあえずさ、これから一緒に暮らしていくんだ、よろしく頼むよ」

「それはこちらのセリフだ、むしろこっちが言うべきセリフだろう」

確かにね、と諏訪子が笑う。俺もつられて笑う。

けれど今気がついた。とても重要なことを忘れていた。俺には笑顔なんてものまで、枯れていたのか。

俺は今、本気で心の底から楽しいと思った、そんな思いを込めて笑った。心の底から今が楽しいと思った、だからこうやって笑顔になった。

だからこうして、また生きる気力がわいているんだ。

「それじゃあ、遅くなったけど乾杯しよう、霧に、私に、この世界に」

「そうだな。俺もそんな気分なんだ」

もう手をつけた酒だけど、乾杯をする。俺はこうしてこの世界に受け入れられた

男は自らの忌み嫌われた力を見る（後書き）

非常に能力紹介が急展開になってしまいました、まあこれから何度
も出てくるものなのでこのくらいがいいのかもしれませんが。じや
ないと、全部わかっていたら面白くありませんし……まあこんなも
のだとわかってくれればOKです。

ダーインスレイヴはそうですね、気になる方はwikiってくださ
い。まあ僕も要約して説明したんで、あれが分かっているればほとん
ど説明したようなものです。

これからは、素直に日常生活を書くことと思っています。
諏訪大戦とかいつ出すか考えなきゃ……（汗

歴史は変わらなくても波紋は広がる

俺は夜を駆ける、それが俺の生き様だから。

血を求める、それが必要なことであり、自らの糧となるから。

そして、今新しい犠牲が生まれた。

「うん、鹿の血もなかなか……」

野鹿の首に口を当てて、食事を開始する霧。もちろん肉までおいしくいただく。

本当なら人間であつた方がいいが、別に大丈夫なようになっている。それが二千年の歳月の力。力は強力になり、それと同時に臨機応変なものとなる。

これが毎日の彼の食事、もうすでに諏訪子のもとに住み始めて早一ヶ月。特に代わり映えのない日常に退屈はなく、むしろ充実様で感じていた。

諏訪子の手合わせに何度か付き合った。神の力は強力であるが、それでも二千年の歳月を覆すほどには至らない。ただし、これには？ただし夜に限る？という一文をつければの話だが。

「なんか、ただしいケメンに限るって言われて虚しくなるのがわかる気がする……」

確かに夜の帝王である彼も、昼間はただの妖怪にすぎない。それは昔から決まりきっていることである、人間さえも認識していることだ、いまさらどうこうしようという気持ちはない。ただ、何か知ら方法があるのなら別だが、それが起こり得ないことなのは、おそらくこの世界の住人の誰よりも詳しいことだろう。それが彼の運命、すべてを知りえるものとしての定めなのだからどうしようもない。

そして今、今度は動物ではなく妖怪がその力の餌食となる瞬間がやってきた

現れたのは妖怪、姿から察するに蜘蛛の妖怪、夜中に獲物を求めて徘徊していたところ、俺という標的を見つけたということだろう。

感じられる明らかな殺意は、捕食対象にしか向けられないものだった。

ただし、相手が悪かったけれども……

「久しぶりに、全力でお相手するか。二千年のうつぶん晴らしになるといいけど……」

期待はあまりできないだろう、力はあまり感じられない。

先手を譲らせてみる、蜘蛛らしく糸をはいてくるが……俺には無意味だ、そんなもの止まって見える。

紫黒を手に纏う、形は……大きな爪にしておこう。

糸を避ければ、全速力で本体へと接近していき腹を貫く。一連の動きは洗練されたものだが、その場の対応はできないだろう、あくまで決められた型を再現しただけなんだから。

そのまま虚空へと抜けた霧の体は、今の成果などなかったかのような素振りさえ見せた。

彼にとっては当たり前前の結果なのだから、仕方のないことなのだが、全力を出し切る前に終わってしまった勝負を悔やむ様子はあるが、彼にはむしろそれでよかったのかもしれない。それはなぜか？

「最近西日本の方が騒がしいらしいし、神様と戦うのならそこら辺の妖怪はオーバーキルの方がいいだろうしな」

そう、最近西日本の方で次々と先住の神たちを破り、配下に従えているという国があるという話を聞いた。間違いなく神奈子のところに違いない。

もうすぐ諏訪大戦が始まるということだ。

おそらく自分が加担しても、結果は変わらないようにはなっているのだろう。けれども今までの諏訪子に借りっぱなしの恩を返すにはこの場しかない。

自分が参加し、できるだけだけの戦果をあげること、洩矢神の評判をあげるくらいは自分にもできるだろう。おそらく一番奮闘した神として歴史に名を残せば、諏訪子もまあ、悪い気はするだろうが満更でもないだろう。

そのため、自分が大戦に参加し、歴史を覆すぎりぎりのことをするのは俺の中では最早規定事項だ。つまり神奈子に対応できる力がほしい、そのためにはそこら辺の妖怪などはオーバークイルでいて、なおかつ強敵との戦い方を磨かなければならない。なかなか複雑な悩みだが、自分には力がある、おそらくぶつつけ本番で慣れていくという戦法もありっちゃあり、というわけだ。まあそれが意味することは一つではないのだが……

要するにだ、神奈子と戦うにしても別に戦い方というものを身につける必要はないが、その代わりに現地で対応法を習得しなければならない。

もしかすると諏訪子と神奈子の頂上対決という可能性もあるわけで、この根回しはすべて無駄になる可能性もあるが、おそらく神奈子の味方の神様は貧弱ではあるまい。

まとめると、今の自分に必要なのは対応力だ。それだけだ。

こんなに長々と俺の戦略を読者の方々に話させてもらったがそう言うことだ、まあ無駄にはなるまい。

とにかく、もうすぐ諏訪大戦が始まるということは間違いないのだ、それなりの蓄えも戦力も諏訪子を用意してある、ミシャクジ達の強さはわからないけどもそれなりの戦力にはなるはずだ。せいぜい負け戦を全力で行うとしよう。恩人の名誉のために。

「さて、もうすぐ夜明けだし、諏訪子も起きてくるだろう。そろそろ神社にもどるとしますか」

今日も一日が始まる

いや、もちろん俺にとっては終わるだよ。勘違いしないでくれよな。

帰ったら諏訪子がもう起きていて、そのことについて少し話したが、まだ先のことだと思っているようだ。

それもそつだろう、だってまだ噂が広まってくる程度のことなのだから、騒ぎからは遠いということだ。

とにかく、俺は眠りに就くこととしよう。

「あゝ、霧も寝ちゃったし暇だなあ」

縁側に座り、足をぶらぶらさせる諏訪子。神の威厳などそこにはどこにもなかった。

しかし、戦が確実に迫ってきているなかでの戦力強化という面の仕事はなにも怠っていない。既にミシャクジ達もいざ戦が起これば戦ってくれるように約束してある、それは諏訪子に対する信頼の表れか、それともただ自分たちの居場所を守りたいだけか？ それは誰にもわからないことだ。

「お？ 参拝客じゃないか、朝っぱらから熱心だねえ」

こっそりとのぞき見をする諏訪子、神がそんなことしていいのかは知らないが、それでも好奇心には勝てないようだ。

「どんなこと話してるのかな……？」

「国境の方の村から聞いた話んだけどさ、隣の国までついに占領されたらしいよ」

「はあ、それじゃあ西日本はほぼ全滅だなあ」

「そうそう、神様がなんとかしてくれないかねえ……」

……隣の国まで？

自分が思っていた以上にことが進んでいることに驚きを隠せない、また、ここまで迫ってきているにも関わらずあちらのことを何もつかめていない、それがどれだけ恐ろしいことかわかっている諏訪子は、眠りについたばかりの同居人にそのことを告げに走る。

強引に目を覚まさせ、寝ぼけ眼の霧に全てを話した頃にお互いの考えは一つにまとまっていた。

そう、ミシャクジ達にこのことを伝え、全面戦争の手筈を今すぐに整えること。

自分たちは貴重な戦力であると同時に、決してかけてはならないまとめ役なのだ。その任務をこなさなくてはならない。

明日にでも諏訪大戦が始まる、霧はそう認識した、おそらく相手は奇襲を作戦としているはず、ならば目には目を、逆にこちらがしてしまえばいい。

けれども堂々と宣戦布告をしてきたならば、こちらも全力で対処する。

いつの間にか諏訪子はどこかに行ってしまったていた、おそらく国境にミシャクジ達を集めるためだろう。

今日の夜にでも俺も移動することになる、準備ぐらいは済ませておこう。

とはいってもそんなものはないんだけどな、せいぜいたっぷり寝ておくとうるか。

それから諏訪子が返ってきたのは、夕方のことだった。

そして夜が更け、零時を回った後に俺は諏訪子にこのように伝えられた。

まず、夜になったら国境に自分たちも移動する、相手は人間以上の存在らしいから、こちらミシヤクジ達と俺たち二人が全戦力になるということだ。

そして夜の間に、俺には神奈子たちがいつごろ攻めてくる探ってきてほしいとのこと、おそらく俺単体を送り込むということだろう。見つかった場合はこちらからの宣戦布告でも送っておけとのこと、要するに奇襲の線をなくしたいわけだろう、それが諏訪子の考えた戦略なんだから文句は言わない。

要するに、夜限定の俺の強さを十分に利用するというわけだ、十分な戦略家ではあるのだろう、単純だが、使えるものはすべて使う精神は称賛に値するものだ。

とにかく今夜が決行の日だ。もう既にあたりは暗闇に包まれている、俺の準備次第でいつでもいいらしい。

「じゃあ今すぐにも言っておこう、早い方がいいんだろ？」

「悪いね、それじゃあ幸運を祈るよ」

俺は返事をせずに飛び立った、しかしこのままでは見つかる可能性も大きい。

俺の気配は夜に紛れる、気配遮断と同じような感じで見ていいだろう。それでも念には念を入れておくのが一番だ。

まあ、俺の五感には夜にはより一層冴えることとなる、相手がこちらを見つけるのより先にこちらから相手を見つけれらるであろう。

それよりも怖いのはいざ侵入してからだ、神奈子のような力のあるものまでごまかせるか？ それはもうかけでしかないであろう、とにかくやってみなければわからない。

さて、早速大きい気配を見つけた、しかしこちらに気づいている様子はない。

そのまま迂回すれば気づかれることなどあるまい。

このように、俺は確実に本丸へと移動する。本丸とはいっても拠点の一つしかないわけだが。

そして俺は本拠地までたどり着いた、中には神奈子の姿も見える。俺は近くの木の子にとまり、できるだけ気配を小さく保つ、不特定

多数の人間から逃げてきた俺にとってこのくらいはお手の物だ。

そして丁度行われている会議の内容に耳を傾ける。

なんでも明日の日が明ける前に攻め込んでくるようだ、今の時期で言ったら大体日の出の二時間前だろう。俺にとって若干有利な時間である。

その後も話の流れを聞いた、その他には特にこちらの利益となりそうな話はなく、そのままお開きとなった。

そして部屋には神奈子だけが残され、俺もそろそろ帰るとするか。

俺は再び空へと駆ける、十分もあれば諏訪子のところに戻るであらう。

俺が戻ると、諏訪子はすぐに結果を聞いてきた。

「明日の朝、日の出の二時間くらい前に攻めてくるそうだ」

「そう、だったらまだ一日あるし余裕もあるみたいだね。とにかく、あとのことは私がやっておくからもう休んでいいよ」

「わかった、じゃあそうさせてもらおうよ」

さてと、ちょっと早いけど寝ておくか、どうせ一日中戦うことになるかもしれないんだから。

さて、決戦は明日なわけか。せいぜい頑張るとするか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5449z/>

東方吸血鬼

2011年12月20日18時50分発行